

Column The undercoat layer including powdered bones: The problem of the origin

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: OKADA, Fumio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00059498

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



칠 기법 연구』『보존과학지 : *Journal of Conservation Science*』 26-3, (사) 한국문화재보존과학회 : 247-258. [「本稿同題」『保存科学誌』 26-3, (社) 韓国文化財保存科学会]

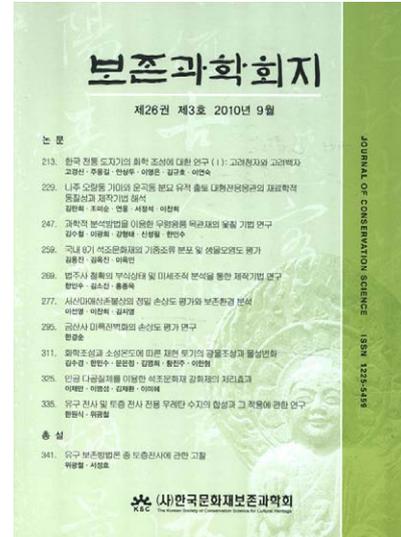
公開先 (雑誌『保存科学誌』) :

<https://www.e-jcs.org/journal/view.php?number=359>

Key Words King MuRyeong's tomb, Wooden coffin, Lacquer, Black paints layer, Number of layers

Abstract We conducted optical microscopy, infrared spectroscopy and SEM-EDS analysis of the lacquer layers on the wooden coffins excavated from King MuRyeong's Tomb. We found four varnishing methods according to the sub-materials of lacquer layers: The lacquer of wooden coffins with black paint layer on the surface were classified with two groups; single layer and three layers. The lacquer of wooden coffins without

black paint layer on the surface were classified with two groups; single layer and two layers. IR spectra of the laquer were same as those of the oriental laquer. The SEM-EDS analysis showed that the lacquer layers were mixed with iron, copper and calcium.



コラム

東アジアの古代漆器にみられる骨粉下地

岡田文男

本特集によって韓国で発表された漆芸品の塗膜分析の結果が日本語に翻訳され、韓半島における初期鉄器時代から高麗時代までの漆芸技術の変遷が容易に把握できるようになった意義は大きい。韓半島における出土漆器の塗膜分析は、韓国国立中央博物館の李容喜(当時)が1980年代に始めたものである。李は、初期鉄器時代における茶戸里遺跡の漆器や、韓国国立中央博物館に収蔵されていた楽浪漆器の分析を手始めに、同僚らとともに原三国時代、三国時代、統一新羅時代、高麗時代と研究対象を拡げ、韓半島における漆芸技術の変遷の解明を試みてきた。それらにより、茶戸里遺跡より出土した漆器の下塗りに黒色顔料であるススを入れた技法がみられ、それが同時期における北部九州地方の漆器の塗膜分析結果と対応すること、楽浪漆器の分析で貞梧洞19号墳出土の盤や、同127号墳出土の皿の下地に骨粉が用いられ、王盱墓(東京大学文学部博物館蔵)より出土した「蜀郡西工」銘のある漆器の下地と相違することが判明した。

漆器の下地に骨粉を混和する技法(これを骨粉下地と仮称する)は中国において漢代までに発明され

たものであるが、近年、その骨粉下地がモンゴルの匈奴墓より出土した「考工」銘のある漆器で確認された[okada2019; otani2019]。骨粉下地は岡田の調査によって宮廷御用漆器をはじめ、高級漆器に用いられたことが判明しており、東アジアにおける漆芸技術の変遷を考えるうえで、まさにキーワードといえるのである。

李容喜グループをはじめとする一連の塗膜分析により、韓半島南部において骨粉下地は三国時代の法泉里百濟古墳(4世紀)、新羅皇南大塚古墳(5世紀)、百濟武寧王陵(6世紀)、統一新羅雁鴨池(7~8世紀)、高麗漆器(12世紀)などで確認されている。それらのことから、骨粉下地は韓半島における漆器制作技術の重要な技法となったとみられる。しかしながら、骨粉下地の技術がいつ頃、韓半島に定着したのか、その点について、現在の分析手段では未解明なままである。ちなみに日本では、骨粉下地は飛鳥水落遺跡の導水管保護材、滋賀県松原内湖遺跡の巻胎漆器など、ごくわずかに確認例があるだけで、9世紀以後は未見である。このことから、骨粉下地の技術は日本に定着しなかった可能性が高いと考えられる。仏教伝来とともに様々な技術が日本に伝えられた中で、韓半島で受容された骨粉下地の技術がなぜ日本に伝播しなかったのか、そのあたりの解明は今後の課題といえる。(引用文献は p.189 参照)